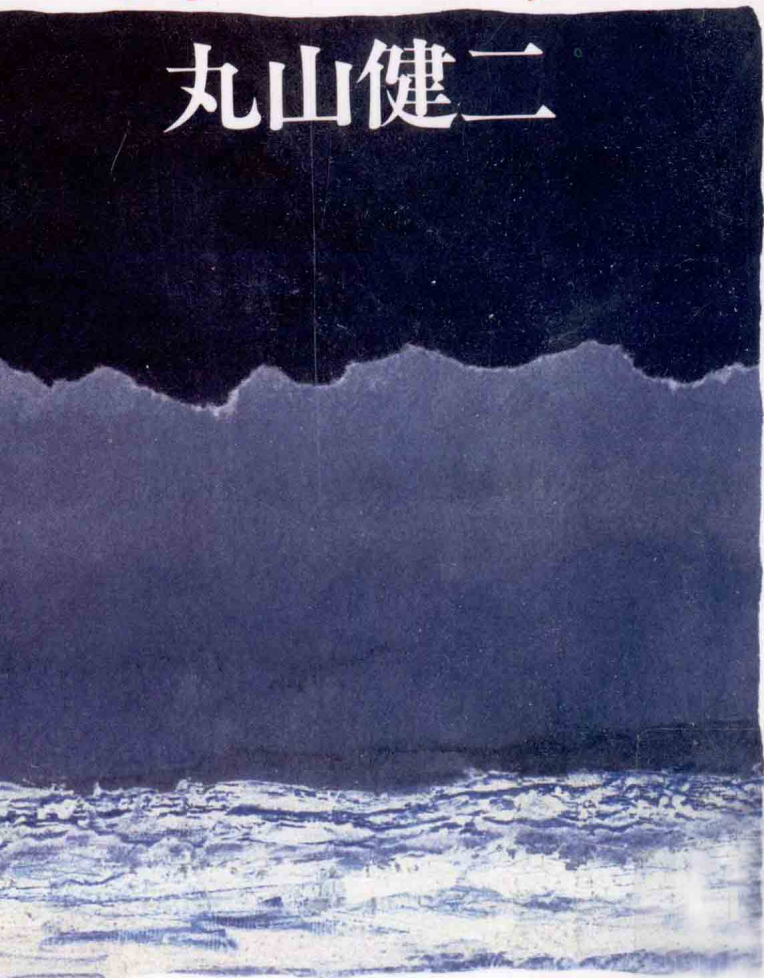


群居せず

丸山健二



文春文庫



文春文庫

群 居 せ ず

定価はカバーに
表示してあります

1988年11月10日 第1刷

著 者 丸山健二

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4-16-728105-8

春文庫

群 居 せ ず

丸山健二



文藝春秋

群居せず・目次

雷鳴の真ん中 11

中年のオートバイ 14

セントバーナード犬《ゾルパ》 17

水呑み作家 20

宇宙人低能説 23

ママシと私 26

美しい山女 29

映画と拳銃 32

勤め人エレジー 35

船乗りは男らしいか? 38

わが青春のトン・ツー 41

刺青願望 44

失望のシエパード 47

盗まれたヤギ 50

プレスリーとビートルズ 53

殴ってやりたい女 56

猟師たち 59

作家になって驚いたこと 62

ある夫婦 65

怪談あれこれ 68

ヘリコ襲来 71

安い元手 74

旅嫌い	77	ああ、ジョギング	120
ジープと私	80	リンゴと牛乳	124
脱サラの夢	83	野鳥あれこれ	127
砂漠の後遺症	86	方言	130
若い映画監督	89	よそ者	133
家賃一万円の別荘	92	飽食の時代	136
一人称のための一ダース	97	冬のタイヤ	139
未知への逃避	102	ワカサギ釣り	142
不思議な関係	105	退屈なサイン会	145
私の音楽ライフ	109	健康人間	148
なりふりかまわずに	114	酒呑みジャンゴ	151

吹雪の埋葬	154
或る夜の出来事	157
テレビ離れ	160
皮算用の彼方	163
本カマ、準カマ	166
グリーン車の受験生	169
火山の歌	172
クマゴロー	175
真冬のラリー	178
音楽の効用	181
英語再び	184

サンドバッグ	187
恐怖の女性ドライバー	190
死んでいたタヌキ	193
仮面ライダーの素顔	196
春の嵐	199
面白い遊び	202
珍しい村	205
白山スーパ―林道を行く	211
新宿24時	226
ロマンなき時代の反逆児	244
アウト・ドア・ライフのプロたち	258

バッド・シチズンは誰か？ 270

変な釣り 273

ナイフの思い出 276

パジャマ族 279

ふぎけた訪問者 282

パンダと交換 285

雑草退治 288

チュウネンデイスコ病 291

メガネマン 294

吹き出す 297

ネズミ 300

狙われている男 303

才能 306

こじつけ祭り 309

ああ、軽井沢 312

死んだふり 315

振りまわされて 318

大いに怪しい 321

森が震える 324

作詞家志望？ 327

立派なアナウンサー 330

まともな写真 333

毒キノコ 336

ビンタ一発 339

ランニング・パートナーの死 342

山のカモメ 345

群居せず

雷鳴の真ん中

(78・6・4)

そろそろ雷の季節だ。去年はほとんど雷らしい雷がなかったから、今年あたりはひょっとするとひどいかもしれない。標高七百五十メートルの土地にあるわが家は、すでに二回ほどあのめくるめく閃光と轟音の洗礼を受けている。周囲が田んぼばかりだから、とりあえずわが家に落ちるしかないのだろう。さいわい被害は大したことがなくてすんでいる。

雷に打たれて死ねたらさぞかし楽だろうと思う。小説家の死にぎまとしてはこのうえなく劇的であり、ただそれだけのために、内容はともかく本が売れてくれるかもしれないし、若い女性の読者が墓参りに大勢集まってくれるかもしれない。

ところが甚だ残念なことに、天はどうやらこの私を毛嫌いなさっているようで、頭上を突然覆った炭よりも黒い雲は、いつも私をたっぷりと威すばかりで、さっさと通り過ぎてしまうのだ。おまえのようなら、くでなしを、そうカッコよく死なせてたまるものか、とでも考えているに違いない。

ハイ・ボルテージのおぞましい気配が立ち去ったあと、まだ稲妻がはるか彼方の大気を八つ裂きにし、稜線りょうせんを闇やみに浮かびあがらせている頃、深い安堵あんどのため息をもらしながらも、私は胸のうちでこう怒鳴りちらす。おお、そうかい。そっちがその気なら、こっちにも考えがあるぞ、と。しぶとく、不様に生きのびて、出版社が全集を出すときにうんざりするほどたくさん小説を書きまくって、百歳を越えて、県知事あたりから送られた赤いちゃんちゃんこでも着てやろうじゃないか、と。

私はしばしば雷を小説に使う。雷鳴と稲妻をストーリーの展開のバネとして利用すると、なぜか作品全体がよく引き締まり、完成度が高まるからだ。似たようなことを考える者がいて、これは音楽にも用いられ、たとえばひとつのきちんとしたテーマを持って作られたLPレコードなどでは、曲と曲のあいだを雷鳴でつなぎ、実にいい感じを出している。雨の音を重ねると更に効果的である。

雷鳴の真ん中を通過したことがこれまでに何度かある。ジープやオートバイを駆ってそのただならぬ重い気配を横切って行くときにも不思議に感じるのは、どうして落雷しないのだろうかということだ。なにしろ私が乗っているのは鉄のかたまりであって、しかもバッテリーも積んだりしているのだから、雷の側にしてみればこれほど落ち易やすい標的もほかにはないだろうに。水田のなかの一本の古釘には落ちるくせに。

マンモス・タンカーに乗ってアラビアまで往復したとき、私は船長にたずねてみた。こんなにも広く、こんなにも平らな空間では、船は雷のいい目標になるのではないか、と。すると船

長は、澄ました顔でこう答えた。大丈夫だと言い切った。落ちても船底の下は水だから、アースとしてはこれ以上完璧かんぺきなものはない、と。なるほどそうかもしれない。では、クルマやオートバイに落ちたという話を聞かないのはなぜだろうか。納得のゆくようにこの説明をしてくれる者に私はまだ出会っていないのだが。

犬を連れて河原でランニングをしているときに雷雲が急速に接近してくると、私はひどく慌てふためいてしまい、どうせ落ちるのなら犬のほうにしてくれと念じ、一目散に家へ逃げ帰る。私は死にたくて困っているのではない。用心に用心を重ねて、逃げに逃げて、まったく予想しないときに落雷を受けて死ねたら、などと虫のいいことを期待しているにすぎない。真冬にたった一発落ちた雷を受けて死んだ村人がいるけれど、まさにその形が理想なのである。

雷を利用して死ぬことは比較的簡単だ。ゴルフ場のような広々とした土地に立って、コウモリ傘でもさしていれば、体の二カ所に黒い穴がポツンとあいて、それで何もかもおしまいになるはずだ。

中年のオートバイ

(78・6・11)

オートバイは本来おとなの乗物だ。ガキどものおもちゃではない。おとなとは要するに、ちやんと働いて家族を養っている男であって、それ以上の条件はない。私は今荒っぽいオフ・ロード用のオートバイにしか手を出さず、単気筒ツィ・サイクルのエンジンを脚のあいだにはさんで、北アルプスの山々を走りまわっているけれど、何もこんな乗り方ばかりがオートバイの愉しみ方ではない。排気量50ccの小型バイクのチョイ乗りでも、ナナハンでのツィリングでもかまわないのだ。

ともかく、あれこれ考えこむ前に乗ってみることだ。若い頃さんざん乗ったからもういいと言おう者でも、三十歳を越えてからあらためてオートバイにまたがれば、ふたたび青春の緊張が甦よみがえって、いつしか複雑きわまりない対人間関係の真つただ中に身を置いてすっかりくたびれはてている自分に気がつき、忘れていた冒険心を思い出すかもしれないか。また、初めて乗る者は、確実にひろがる世界と新しい自分を発見するだろう。エンジンを回し、ハンド

ルを握って、わずか数十メートル走った途端に肉体のあちこちが熱くなり、更に数キロも走れば家庭や会社や親戚や定年といった数々のしがらみがいとも簡単に消滅するのがはつきりと自覚できるだろう。もちろん錯覚だ。だが、これまでそれほど素晴らしい錯覚を味わったことがあるというのか。

暖かい春の風が吹く満月の夜に、こっそりと出発しようではないか。眠っている家族を起きないようそと家を出て、爆音が聞えないところまでオートバイを押して行き、それから海へ向って一気に突っ走るのだ。スカッとする時間がはるか彼方までつづいているではないか。だからといって、乗用車を使ってそっくり同じことをしてもまったく意味はない。四輪はまずい。四方を窓に囲まれて、転倒の心配がほとんどないような乗物は、買物か通勤か家族旅行にでも使えばいい。

オートバイの魅力は全身で風を感じることにほかに、マシンといっしょに体を傾けてやらなければカーブを曲れないことにある。これぞまさしく独立の精神にほかならない。誰の力もあてにならないことをたっぷりと思ひ知らされるだろう。居眠りする余裕はない。

走りながら大声で笑ってやろうではないか。うじうじしていたこれまでの日々を、いつもの酒場で、いつもの女にチョッカイを出し、いつもの連中と愚痴のこぼしっこをしていた自分を嘲笑ってスロットルをいっぱいに開けようではないか。ついでにローンの数々と、皮下脂肪も笑ってやろう。言葉にしがみつき過ぎていた生活もだ。

群れなければ一メートルも走れないような、オートバイを取り上げられたら何も残らないよ